

この度、トルコ南東部で発生した地震により、被災された多くの方々、またそのご家族の皆様、心よりのお悔やみとお見舞いを申し上げます。連日ニュースを見ておりますが、2月10日時点で亡くなった方の数がトルコとシリアを合わせて、既に2万人を超えており、建物が崩れていく様子、がれきの下で救助を待っている方の映像などが繰り返し放映されるたびに、心が押しつぶされそうな思いが致します。被災地支援にあたられているすべての関係者の皆様へも、心よりの敬意を表したいと思います。

2011年の東日本大震災の折、私は英国にいました。テレビでの映像やインターネットで流れてくる画像が、日本のものだと最初は受け止めることができず、ひたすらにインターネットの記事を次々と読み続け、ようやく現実だとわかったときの重苦しい気持ちを今も忘れることができませぬ。今もまた、遠い日本にあり、トルコのニュースを探し続けている自分に、トルコと言う国が、日本と同じように大切な国になっているのだということを実感しております。

当時、英国では本当にたくさんの方が、日本の為にチャリティー活動をしてくださいました。オックスフォードやロンドンの街中で、横断幕や募金箱を持った日本の人たちを見て、この国にこれだけたくさん日本人がいたのかと驚いたことを思い出します。バスで隣の席に座った見知らぬ年配の女性が、私が日本人だと知ると、「日本の状況はどうか。私の心は日本人たちと共にあるから」と飴を一粒くれたことや、「阪神大震災のときに日本にいたけれど、驚くべき速さで復興したから、今度もきっとそうよ」と、呆然とする私の背中をなでながら励ましてくれた友人の言葉にどれだけ救われたことでしょうか。そのときの気持ちを思い出しながら、今私がトルコやシリアの方々に対してできることはないかと、頭を悩ませる日々です。

今年はトルコ共和国建国100年、来年は日本とトルコの国交樹立100年、再来年は日本・トルコ友好135周年と言う節目の年になります。1890(明治23)年、和歌山の樫野崎沖で、オスマン帝国の軍艦エルトゥールル号が折からの台風の影響で遭難・沈没し、500名以上の犠牲者を出した痛ましい事件が起りましたが、生存者を日本人が救助・介抱したこと、そして、明治陛下の思召しにより、遭難者が日本海軍の比叡と金剛によってイスタンブールに送り届けられたことで、両国の友好の歴史に刻まれる大きな出来事となりました。そして、両国の絆は、1985(昭和60)年のイラン・イラク戦争の時に、在イラン邦人をテヘラン空港からトルコ航空の旅客機に乗せ、自国民よりも優先して脱出させてくれるというトルコの計らいによって、一層堅固なものとなります。父は、「海で受けた恩を空で返すとは、トルコの人たちは粋だよな!」と、よく仰っていましたが、現在、東日本大震災の際にトルコの救助隊が派遣された宮城県内で、募金活動が始まっているというニュースを見て、今度は「陸の恩を陸で返す」ときなのだと、心が熱くなりました。

私自身、多くの方々から「何か自分たちにできることはないか」と、本当にたくさんのお問い合わせをいただきました。日本・トルコ協会でも、義援金口座の開設準備を進めていると聞いております。引き続き、多くの皆様がトルコに心をお寄せいただくことが、トルコの未来につながっていくと信じております。トルコ・シリア両国の被災地の復興、そして、被災者の方々を始め、両国民の皆様が心穏やかに過ごせる日が一日も早く来ますことを祈りつつ、日本の地より、両国に思いを寄せ続けたいと思います。

日本・トルコ協会

総裁 彬子女王